

愛媛大会がやってくる。愛媛を離れた身でも何だかワクワクするのは、きっと愛媛の魔力に憑り付かれてしまったせいだろう。外から見ると「みかん」と「坊ちゃん」くらいしか思い浮かばず、それこそ日本地図のどこに位置するのかさえあまり知られていない愛媛。しかしいったん中に入り込むと、その奥深さと暖かさにハマること請け合いだ。海あり、山あり、離島あり。里あり、街あり、温泉あり。花あり、酒あり、祭りあり。そこには人々の生活と風習が息づき、色とりどりの産物がちりばめられている。

そう、愛媛の魅力はその多様性にある。「特徴がない」「インパクトがない」というのも、その裏返しに過ぎない。「一言で表せない」ことが、まさに愛媛の愛媛たる所以なのだ。

だから愛媛には「地域」という言葉がしっくり来る。「顔の見える範囲」ごとに同じアイデンティティを持った人々がまとまり、同じ空気を吸って暮らしている。「地域づくり」は地域の個性を認識することから始まると言われるが、愛媛はすでにその素地を十分に持っていることになる。



寄稿

愛媛大会に期待すること

九州大学大学院教授 丹羽 由一

では次のステップは何か。まず一つ目は「自分の地域を語れるようになること」。外国に留学や転勤した日本人は皆、自分が日本についてほとんど語れないことに気が付き愕然とする。日本は大変個性のある国で、いろいろ興味を持たれており、何かと質問されることが多いが、相手を納得させる答えが出てこない。わかっているつもりで実は何もわかっていない。「日本のどういう点が、どういう理由で面白いのか」を認識していないのだ。そして皮肉なことに、外国暮らしが長くなる頃「日本とはこういう国だったのか」とあらためて体得する人が多い。

これは地域についても同じことで、「自分の地域を語る」にはまず「他の地域を知る」ことが不可欠だ。今回の愛媛大会はこの両方が同時に可能な、文字通り貴重な出会いの場である。

地域づくりの二つ目は、「よその人と対等につきあえること」。四国はもともと「お接待」の風土があり、外来者をもてなすことには慣れている。さらに一歩進んで、お客さん扱いせずに自分たちのコミュニティに招き入れ、貸し借り無しで対等につきあえるところまで行けば、地域の本物の魅力を正しく理解してもらうことができる。

商店や飲食店でも、何となく入りやすい店と入りにくい店がある。腕まくりして待ち構えたり、常連客ばかりの店は敬遠されるが、一方気さくな「一見さん歓迎」の店は常に人が入りし活気がある。大会でも、全国から来る仲間に「そのまんま愛媛」を味わってもらおうのが何よりのおもてなしだろう。とにかく大いに飲み、食べ、そして語りましょう！

(私事ですが6月から福岡に転任いたしました。えひめ地域政策研究センター在勤中は大変お世話になりました。紙面をお借りし皆様に篤くお礼申し上げます。)